

「明けがらす」考

—新内浄瑠璃の詞章—

宮 地 敦 子

近世、浄瑠璃の品位を評した有名な俚言として「土佐上下に、外記袴、半太羽織に、義太股引、豊後かあいや丸裸」がある。かわいそうに一糸もまとっていないと評された豊後節は、宝永・享保年間に隆盛をほこったが、元文四年（一七三九）、公益を害するものとして全面的に禁止の厄に会った。残された門弟そのほか縁ある人々は、それぞれにわかれ、上方では菌八・繁太夫・正伝など、江戸では常磐津・富本・清元・新内などの諸浄瑠璃に分派した。これらのなかで、豊後節にもっとも近いのは新内節であろうといわれる⁹⁾。

小稿は、初期新内浄瑠璃の中の「端^はもの」の一である『明烏夢泡雪』をえらび、翻刻および若干の解説を加えようとするものである。底本は新内資料室所蔵（藤根道雄旧蔵）の八行本を用いさせていただいた（一般の正本は六行本が多い）。これには表紙がない¹⁰⁾。上・下の別がない（一般の正本は上・下に分れている）。『国書總目録』に示されているだけでも、『明烏夢泡雪』を活字化したものは数種類あるが、いずれもその表記は正本どおりではない。通読の

便を考慮してのことであろう。小稿では、つとめて原文に忠実であるように心がけた。ただし、次のような私意を加えた。(一)筆者が最少限必要とみとめた振仮名・振漢字および活用語尾は、原文と区別するため(一)につつんだ。他本によったばあいには、その旨注記した。(二)本文に句点がなく、読解に不便かとおもわれる箇所には、(句点を付さず)一字あげとした。なお、ギン・オトシ・三重など、フシ付け⁽⁴⁾については割愛した。

以下、二節では翻刻、三節では紙数のゆるす範囲の解説・考証をおこなう。先賢の御叱正を仰ぎたい。

二

山名や浦里
春日や時次郎

明烏夢の泡雪

豊嶋國太夫 直傳

へゆふぐれ事^(毎)の。うき雲に。心をのせし四つ手かご。ほんにそるふたかたとかた。おもき恋路^(くいにち)もかるくと。あ

かけると思ふおのが身も。かけられてゐる心どし。あへばわかれが。思われて。烏^(からす)ハさのみにくからで。あ

の鶏^(にわとり)がめかりせぬ。はやくうたふも客による。しんきくがさしつめて。むねのつかへも今ハはや。おすに

一オ さがらぬ。あげや町。五丁まちく噂^(うわさ)有ル。時次郎ハ山なやを。せかれて忍^(しのぶ)たかの「目にかかる浮身^(うきみ)

ぞ。夜の鶴^(つる)。吉原すずめ口くんに。しんでしまへば時鳥^(ほととぎす)。めいどの鳥^(とり)を聞^(き)ものを⁽⁶⁾。しなぬさきから先^(さき)

世を。おもひやりたる泪川^(なみだ)。心のそこは人しらし。へ夜^(よ)見せじたくにそれくのへやへ櫛箱^(ぼこ)かぢみ立。中

のよいどし二三人新^(しん)ぞうまじり寄合で。浮身^(うきみ)の上に取ませて。客^(きやく)の噂^(うわさ)も数々に。夕へのくぜつ此中^(なみだはなし)の泪咄

のためいきに。昔^(むかし)恋しといふも有。いつもの事とは云ながら。取分^(うりわけ)ヶけふの身ごしらへ。かわいく男に見せ

るのが。浦山しい云も有。新ぞう子共あどけなく。けふは私はすかぬ客 やくそくでござんすが とふぞば
一ウ んにはこぬ様に。」くわん音様をおがんだり まじなひもするた、みざん。くるとあたればおきなおす。咄
のこしを。おかしさこらへ。すいたすかぬはまだはよい。なじみの壺人つ、も取留やうとはせず。人のめう
代に出る計がてがらじやないと。姉女郎の一声に。ねづミまひして。ゆかふ成小袖た、めばま一人は。ざし
きはくやらかゞみ立かた付ヶ。まはるぞいそがしき へさあゝもふ見せがでたぞへ。身ごしらへがすんだ
らば はやふ出さんせゝと。やりてのかやがのゝれば。皆一どきにばらばらと。おりるはしごのおとた
へてざしきゝもしづか成 へ春雨の。ねむればそよとおこされて。乱染にし浦里は。どふ」したゑんでか
二オ

の人に。あふたしよてからかわいさが身にしミゝとほれぬいて。こらへじやうなきなつかしさ。人めのせ
きのよぎの内。明てくやしきびんのかみ なで上ノウ時次郎様。此様にせきせかれさぞきづまりに
ざんせう。それをこらへて下んすも私かわいと思ふての御心ざし。嬉うござんす忝(い)と。いだしむれ
ば いやおれゆへと引しめて。物をもしはずしめ合て後は泪にくれけるが。男泪をはらりとながし いつまで
こふしてゐたとてもかぎりもなき二人が中。ながいする程そなたの身語り。此程段々咄ス通。国のおやちの
二ウ 江戸表地頭の方へいだす金。式百兩は扱置で。」其外一もん出入屋敷。語りつくして此有様。そなたも共に
といゝたいが いとしいそなたをてにかけて。どふ成物ぞながらへて我なき後で一へんの。ゑかうを頼(む)
さらばやと。云捨立を取つきて あんまりむごい情なや。こよひはなれて。こなさんの。まめでいさんす其
身なら又あふ事のあるふかと 楽事もあるべきが。しなふとかくござんした身を。いかなきづよひ女子じや
とて。どふしてはなしやらりやうぞ。かねて二人が取かはす きせうせいしはみんなあだ。どふでしなんす
三オ かくごなら。三津の川も。是。此様にふたり手を取もろ共と な」せにいふては下んせぬ。私をころさぬお
まへの心 うれしいよふで わしやいやじや。此程おまへのかほかたち やつれさんした其おりから。夕へ

の床のむつ事に。しこをつつしむ。此白むく。是程迄思ふ物。すて、ゆことは。さりとは。おによりこわい御心。わしややりはせぬ。はなしハせぬ。ころしておいてゆかんせと。男のかたにくいついて。身をふるわしてなきるたる。浦里様へやりてのかやが声として。此子供は火を見るとねむるかど声はしたなくのゝりて。浦里様へちよつとお目にかくりましょとよび」立れば。浦里はつと思へ共。そしらぬ顔して。何の用でござんすといへハ。かやがつこど声。いや外の用でもござんせぬが。あのおまへの客衆へ。きけば夕へからのつゞけにござんすげなが。わかぬ衆にとふても。どの客衆でやらしらぬといふ。今のくぜつのせりふも時次郎さんにきハまつた。だんながよばんすさあござんせと。浦里が手を取て引立る。となりざしきにてい主待かね。たぶさをつかんでくるゝと手からミ。どうで口でハきかぬやつと。つみもむくいも後の世も。し

四オ
らがあたまの 米かミも」はりきる斗のやら腹立 引立てこそおりにける へ後に大ぜい男共。あの客故に

あのやうに浮目にあハしやる浦里様 ことにかゝりもよほど有。それにかくれて にかいへ上り。いつゞけなどゝハふといやつ。引ずりおろしてふみのめせと。恋路のやみのくらかりを。む二む三に引出シ。ふむやらぶつやらむしるやら。たゞきすへられ ぜひもなくゝ箱はしご。よふゝつたひおりけるを。すぐにおもてへつき出し。門の戸はたとさしかためせうさす。おとぞきびしけれ。内にへてい主が浦里を 庭の古木にくゝり付。」おりふしふりくる雪ふゞき。はうきおつ取打ッ音に。かむろみどりが取つて。旦那様

もふ御かんにな被成ませと。なげく禿も共しぱり。浦里泪のかほふり上。私が身ハぜひもなし。みどりに何ンのとが有て。あの子はゆるして下んせと。いへばてい主もふびんさと。思へどわざと声あらく。やい浦里客をせく事客の為。女郎大切。しんたいがだいじ。あの客もいまだわかき人。あまりしげゝ。かよわれてハ。親がゝりなら勘当うけ。主持ならバ親方の手前。しぞこのふハしれた事。此程年切かへしも。あの客衆五オ
じやと有ル。」此上ハ心中か。かけおちか行末へ迄がふびんさゆへ。たとへかたきのすへにもせよ。わがが

へと成し女郎 ことに禿の内より。きりやうへ人にすぐれたれば 外の子共とちがひ。心を付テそだてし物。何のにくひことがある。ここをよふわきまへて思ひなをしてほうこうせよ(と)。(四) たび／＼るけんをくわへても 夫をそれ共聞入ぬ。其くるしみも心から。おのれがつミおのれをせむる。みとりめもおのれがつかふ禿なれば。外の者に見せしめ。思ひ切心なら。今でもなわをゆるしてくれん。コリヤ男共きを」つけいとい、すて／＼おくの一まに入にける へ浦里後を打ながめ。泪にくれてゐたりしが 詞 エ、情有ルおことばな

れど。是斗へどふもわすられぬおゆるし被成て下さんせ。まだ此上にどのやうな。かなしいくるしいせめ苦でも わしやいとやせぬ。どうなつても思ひ切られぬ。いつそそへられぬ者ならば。一所にしにたい時次郎様。ころして下んせ しにたいわいのう へきのふの花ハけふの夢。今へ我身につまされて。ぎりといふ字ハせ六オ ひもなや。つとめする身のまゝならず。わかれとなれば 今さらになせ共なき はなれぎハ」 詞 エ、此くるしみに引かへて。あの二かいの三味せんハ。いつぞやぬしのゐつゞけに。ねまきのまゝに引よせて。たがいに語るたのしみミの今よひハ引かへ。今ごろは どこにどふしてゐさんすやら。とにかくそれれぬ二人が身の上 あぢきなき浮世じやナア。へすいた男にわしや命でも。なんのおしかりぞ露の身の。きへばうらみもなきものを。へコレみどりさぞそなたハかなしかろ。おれがにくかろ。こらへてたも。わるい女郎

六ウ につかわれて。思わぬくるしみかんにしや。こよいかぎり此雪ハ何のむくい」ぞ。さそさむかるかわいやのふ。イエエわたしはさむふハごなりませぬが。次郎さんハあのよふに若衆にたゝかれさんしたが。おまへハくやしうござりませう。わたしもかなしうてならぬわいのふ よふいふてたもった。そなた迄も其様に。ぬしを思ふてたもる者。わしが心をすいりやうしや。何ンのるんくわに。此様にいとしい物ぞ さりとてはけいせいにまことなしとハわけしらぬ。やぼの口から いきすぎの すいのすい程はまりもつよく。たゞ七オ なつかしういとしさの ぐちに成程恋しいもの。たとへ「此身ハあわ雪と共にきゆるもいとわぬが。此世のな

ごり。今一度あひたい見たいとしやくり上。きやう氣のごとく心もみだれ。泪の雨に雪とけて ぜんご。せうたいなかりけり。へ男はかねてよいのトこし。口にくわへて身をかため しのびくへてやねづたい。それと見るよりかなしきの つたへてたむ松忍だも こよい一夜のかけはしと あしもそごるに へまだめなき へ見るに浦里うれしやと。かなしきこわさあぶなさに。とび立斗に思へ共。身へいましめのつたかづら。ふりつむ雪にとぢられて。せん方なくもうぐひすのねぐら。たゞよふ斗也 なんなく下へおり立て 二人がなわを切ほどき。コレ、浦里。こゝでしぬるもやすけれど のがるゝたけはおちてミン。此へいをこす斗さいわい是なる松の枝。つたいてゆかんもろともと。たがいに手ばやく身ごしらへ。みどりも共にとりまする。かわいや此子は何とせん。ヲ、心へたりとみどりをこわきにひつかへ。かいくしく時次郎まつ 八オの 小ゑだを浦里に」しつかと持せあたりを見廻シ。しのびがへしを引はづし はしことなしてさしおろし。やうく三人へいのうへ。おりんと思へと女の身。浦里はむねをすへ しぬるとかくごきわめし身の上。何かいとわんサア一所と。手を取くんで一足とび。げにもつともとうなづきて。たがいに目をとぢ一と思ひ。ひらりととぶかと思しゆめハ。さめて。あとなく明けがらす のちの。うわさやのこるらん

八ウ

いづみやごん四郎板

三

明和六年（一七六九）七月三日、江戸浅草蔵前の伊勢屋の養子（または幕府御賄方の伊藤伊左衛門伴）伊之助が、新吉原の鳶屋（または扇屋）抱えの遊女三芳野とともに廓をぬけ出し、三河島田圃の辺で心中した。時に男は二二歳、女は二四歳。しばらく心中事件のとだえていた折から世間でさわがれ、二人のために比翼塚が立てられたともい

われる。そのころ、劇場以外の浄瑠璃として、お座敷浄瑠璃（註）の創作をこころみつつあった鶴賀若狭掾は、このトピックをもととし、男女の名前を変え、季節を変え、『明烏夢泡雪』と題して作詞・作曲したものとされている。その開曲は、この事件後まもない頃であろうとされるが、確実な年月は判明していない（おそらく一七七〇年代であろうとするのが通説である）。

この曲は、さきにもふれたように普通上・下に分かれるが、上の巻のはじめの「夕暮れごとの……」から、二オ「座敷々々もしづかなる」までは、いわゆるオキ浄瑠璃である。カラス・ニワトリ・タカ・ツル・ホトトギスなどの「鳥づくし」のあと、新吉原の夜見世支度の描写がある。ここまでの、いわば端場（註）は廢曲となつてしまつてゐる。つぎの「春雨の……」から、四ウ「鏡さす音ぞきびしけれ」までは普通「浦里部屋」とよばれる。揚屋の算段にも事欠く時次郎は、ひそかに首尾して浦里の部屋にまぎれこみ、居続けをきめこんでいたが、二人の口舌を、遣手のかやに聞きとがめられ、女は楼主に引渡され、男は若い衆の手で表へつき出される。

つぎに「内には亭主が……」から八ウ「のちの噂やのこるらん」までが下の巻で、普通「雪責め」とよばれる。春雨はいつか「雪ふどき」となり、浦里は庭の松の古木にしばらくつけられ、時次郎と切れるようにと責め折檻（註）を受け、それをかばう禿（註）みどりまでも「共しぼり」にあう。浦里は「たとえ此の身は泡雪とともに」消えてもいとわぬが、今一度時次郎に逢いたいと、涙にくれて正体もなくしたころ、屋根伝いに忍んできた時次郎が、二人の縄を切りほどき、三人一緒に塀の上からひらりと飛んだと思えば、それはすべて夢であつたという筋書である。

『日本音曲全集』などには頭注があり、岡本文弥『遊里新内考』（同成社・昭42）には、語釈のほかに、現行演奏（語り方、歌い方、イロコトバ、また間（註）など）のくわしい解説がある。小稿では、紙数の関係上、オキ浄瑠璃の部分は一切省略し、浦里部屋以下の語句のいくつかについて触れ、「明けがらす」の語誌について少々述べるにとどまる。

ニオ春雨の、眠ればそよと起されて　オキ浄瑠璃が終り、これより本筋に入るわけで、季節は「春雨の（降る）ころ」（といてもまだ雪とは縁の切れない浅春）であることを、この「春雨の」という句で提示したものと考えられる。（ほかに『藤桂恋の柵』では「夏の夜の」、『里空夢夜桜』では「春の夜の」が、それぞれオキ浄瑠璃の終ったところで使われている）。現在、実際に演奏されるばあいには「はるさめエーラーのオーラー（テトンシャン）」というように、次の「眠れば」に移るまでに、産字（ここでは〔me〕の〔e〕、〔no〕の〔o〕）を伸ばし、三味線の相の手も入るので、（読まずに）聞けばあいには、「春雨の」を独立句としてうけとめることができるのではあるまいか。つぎに「眠ればそよと起され」たのは朝なのだろうか。それとも夕方なのだろうか。のちの「明けてくやしきびんの髪」（二ウ）に目をむけると朝とも解されないわけではないが、その他の語句との関係を考え合せると、夕暮の方が説明しやすいのではないかと筆者にはおもわれる。すなわち、まず、オキには「夕ぐれごとの浮雲に」にはじまり、「夜見世支度」の語も見えること、また、浦里のクドキの直後に「遣手のかやが声として、この子どもは灯を見ると眠るか」（三ウ）とあるからである。時次郎は「ゆふべから居続け」（四オ）であり、よるひるなしの痴話口舌、夜着にかくれてのうたた寝を起されたときには、次の日の夕暮れであったと解するわけである。しかしまだほかの考え方もできるかもしれない。大方の御教示をまつ。ちなみに、のちの嘉永年間に義太夫に移曲された『明烏六花曙』には「煙に憂さは晴らしても晴れぬ思ひの時次郎。誰が恋人と夕まぐれ」とある。

ニウ 人目の関の夜着の内　「人目の関」は、他人の目が逢瀬の妨げとなつて思うにまかせぬこと。忍ぶ恋路の邪魔となる人目の意。日本国語大辞典には『桂宮本件文集』や『とりかへばや』などの例があげられている。くだって室町時代の『音なし草子』には「人めの関にもらしわび、いたづらにのみあしがきの」などの例をみるが、この句がしばしば用いられるようになるのは江戸時代に入つてからであろうとおもわれる。『毛吹草・二』には、連歌恋の詞として「むつごと」「涙川」などととも「人めの関」が示されており、『松の葉・四』には「ゆるさぬものを逢坂の

人目の関の忍ぶが岡」など三例ばかりみられる。また、『艶道通鑑・恋之下』には「人目の関に形はとめられても、心は君が住むかたに通ふ」とある。これらの例を援用すると、「人目の関の夜着の内」は「浦里・時次郎の逢瀬の邪魔となる」人目の関から二人をかばう夜着の内」という意になるのであろう。しかし一方では「人目から守る関としての夜着の内」と解されなくもない。後者を採ると「人目の関」の意味は従来のそれとは逆になる。近世後期ともなると、このようなあいまいな用法も生ずるのかもしれない。新内正本にはほかに次のような例がみられる。

わづか四月か五月にきつうやつれさんのたの 煩うてばし下んすなと。人目の関にうろくくと。辺りまばゆき折節に。

△傾城音羽瀧・上▽

なお、「夜着」につき少しつけ加えておきたい。瀧川政次郎『吉原の四季』では「積夜具は、三つ蒲団の敷きに大蒲団一枚であるが、夏はそれに蚊帳を添え、冬はそれに小夜着を添えた」(205P)とある。新内のオリジナル曲であった本曲は評判高く、のちに芝居の物語りとして、清元・義大夫などに移曲されたが、そのばあい、前者では「屏風の内の時次郎むざんに引出し……」△明烏花濡衣▽、後者では「浦里は…時次郎を無理に炬燵へ忍ばすれば(みどりは機転、ありあはす夜着打ち着せて)」△明烏六花曙▽となっている。本来素浄瑠璃である新内では「夜着の内」が使われ、芝居用の清元・義大夫では、視覚的条件のためか、それぞれ「屏風」および「炬燵(と夜着)」の用いられているのは興味ふかい。

三ウ 死期をつつしむ此の白無垢 (死恥をおそれ用意した) 表裏共に白絹を用いた着物。死装束としての真白な衣服。この語はすでに『曾根崎心中』に「初はしろむく死に出立」とあり、めずらしい語ではないが、新内正本にはとくによく用いられる。たとえば、

おまへもわしも新しう、仕立てておいた白むくを、共に着かへて死恥を人に見せじとつつしみて、

△恋衣对白無垢▽

どうで今宵は過されぬ。おれは覚悟をしてゐると、押肌ぬげば白むくの、思ひつめたる死出立。

△かへりなきなりりのちげ 帰咲名残命毛△

もう丑三つのうしや覚悟もと、清き白むくを、対に二人が行く道と

△まよめちそめのみかきは 眞夢血染抱柏△

しづかに用意と取出す、此の白むくの着衣はじめ、正月ものに引替へて、冥途の旅の晴小袖

△うきなのほつもんび 浮名初紋日△

なお、吉原で「白無垢」といえば、「八朔の白無垢」をさすことが多いようであるが、新内のオリジナル曲では、この用法は未見である。

六オ きのふの花は今日の夢…… 人の世の定めはなくはかないことのとえ。「昨日の淵は今日の瀬」の類。謡曲『葵』には「人間の不定、芭蕉泡沫の世の習ひ、きのふの花は今日の夢と、おどろかぬこそおろかなれ」とあり、「きのふの花」以下は『松の葉・三』の三下りの歌「かづま」にもみえる。さらに、後述の長唄メリヤス「いもせ川」にもうけつがれる。この場面は、庭の古木にしばらくつけられている浦里の耳に、他の遊客のいる二階からメリヤスが聞えてくるという設定になっている。『藤根道雄遺稿集』には「浦里の嘆きからんで、メリヤス『いもせ川』が、余所事で唄われる。丁度『夕ぎり』吉田屋の場で、地唄の『ゆかりの月』を用いた筆法で、立体的な効果をあげているが、この歌は宝暦七年（一七五七）に刊行された長唄メリヤス集『豊年蔵』に載っているもので、その「昨日の花は」から「消えば恨みはなきものを」まで借りたもの、そしてこのメリヤスは『壇浦兜軍記』阿古屋琴責めをうたったもので、多分、当時流行っていたであろうが、それを浦里の雪責めの場にはめたのは、作者の手柄であろう（132p）とある。『日本歌謡集成・九』によれば、「いもせ川」の歌詞は次のごとくである。

「昨日の花は今日の夢今は我が身につまされて、義理と云ふ字は是非もなや、勤する身はままならぬ、（別

となれば今更に往せともなき離れ際 [] いとし男に私や命でも何の惜しがる露の身の（消えれば恨みはなきものを）（なんば尋ねても景清が行方水の底まで阿古屋は知らぬ、どうでも重様粋ちやもの、後の朝の文ばかり積る思ひの妹背川）

みぎのうち、（ ）の部分は、新内演奏のばあい、近来、省略して歌わない部分。 [] は、新内正本で、浦里の愁嘆の詞を加えた部分。（ ）は、正本にはもともと採られていない部分である。なお、「いもせ川」の「いとし男」は、正本では諸本「すいた男」となっている。「いもせ川」にも「すいた」という本文のものがあつたのか、新内正本で変えたのか、今のところ明らかではない。

セオ 泡雪とともに消ゆるも…… 「泡雪」「沫雪」は、ともに泡沫のように消えやすく、やわらかい雪。（したがってもとは「淡雪」とは別語）『古事記・神代上』には阿和由起の若やる胸を」という仮名書例があり、『日本書紀・神代上』には「踏堅庭而陥股、若沫雪以蹴散」とある。（のちの『源氏物語・行幸』に「堅き巖も、あはゆきになし給うつべき御けしきなれば」と、荒姫君の容子をえがいたのは、この書紀の表現をふまえたものである）万葉集にはすべて「沫雪」の表記で十数例の歌がある。『和名抄』には「沫雪阿和由起其弱如三水沫」とあり、「あわゆき」の条件は「やわらかい」「きえやすい」ことであつたことがたしかめられよう。さて『古今和歌集・恋一』には「あはゆきのたまればかてに砕けつつ我が物思ひのしげきころかな」、『後撰和歌集・冬』には「雪のすこし降りける日…かつ消えて空にみだるるあはゆきは物思ふ人の心なりけり」などとあり、これらは普通「淡雪」と解されている。しかしながら、平安中期以降には、語中尾の[F]が[W]へ移行する現象（いわゆるハ行転呼音）があり「泡雪」「淡雪」いずれもアワユキと発音するようになったため、平仮名書きではそのどちらであるか疑問がのこる。『菟玖波集・一』には「淡雪は春のしるしに消えそめて 薄きけぶりは草の下もえ」という漢字表記があるが、もつと古い例をさがすべきであろう。なお、『易林本節用集』には「泡雪」「沫雪」「淡雪」いずれにも「アハユキ」の付訓があり、もはや完

全に混用しているのである。

ハウ 手を取りくんで一足飛び 『ロドリゲス日本大文典』には「Issou tobi (＝足をそろえて跳ぶことをいう)」とあり、『たとへづくし』には「鴉からすの一足飛いっせとび」とある。禿みどりを小脇にかかえた時次郎と浦里が、塀をこえるのに「一足飛び」を用いたのは「明けがらす」の「からす」の縁であろうと筆者にはおもわれる。

ハウ 覚めてあとなく明けがらす 「ひらりと飛ぶかと思し夢は覚めてあとなく、明けがらす」における「なく」は「夢はさめてあとかたも無く」と、「朝をつけて鳴く」と、を掛けたものである。

さて、この曲の始めの部分と終りの部分とは、「鳥」にかかわりある詞章が目につく。すなわちオキには「鳥づくし」があり、雪責めの後半には「飛び立つばかりに思へども」(七ウ、「うぐひすのねぐらたゞよふばかりなり」(八オ)、および前項でふれた「一足飛び」(ハウ、「ひらりと飛ぶ」(ハウ)などである。これらは外題の『明鳥夢泡雪』とのかかわりからつとめて用いられたものであろうと解される。

この項では「明けがらす」およびそれと関連ある語について述べる。まず、「からす」という鳥名は、上代から用いられている、その複合語・連語に関しては、いくつかの語の消長がみられる。すなわち、「夜鳥」(万葉・二二六三)、「朝鳥」(万葉・三〇九五)、「子持がらす」(古今和歌六帖・卷六)、「月夜がらす」(新撰和歌・卷六)などは古くから見られるが、当面の「明けがらす」は、ようやく近世にいたり、「夜明けがらす」「明けのからす」などの語の介在を契機として使われはじめたのではないかと推測される。以下には、まず「からす」が、主として文学作品においてどのような扱いをうけていたかをのべ、つぎに「夜明けがらす」および「明けのからす」についてふれ、のちに「明けがらす」についてのべることにする。スズメ・カモメ・ツバメなど、メで終る鳥名は少なくない。一方、カラス・ウグイス・カケスなど、スで終る鳥名も少なくない。これらのうち、カラスは、その鳴き声を擬声語化したカラに、接尾語スの付いたものであろうとされる(スズメも、同様の語構成であらうといわれる)。さて、「鳥」につき、中国の

『説文』には「烏、孝鳥也」とあり、その影響を受けてか、『和名抄』などの漢和辞書、『懐風藻』などの和詩においても、積極的に善鳥として扱われることがある。しかし、和歌・和文ではその様相が異なる。たとえば『万葉集』における「からす」の単独用法は「可良須とふ大をそ鳥（↑大バカ鳥）のまさでも来まさぬ君をころく」とぞ鳴く」（三二二一）、「婆羅門の作れる小田を喫む鳥 腫れて幡幢に居り」（三三八五〇）の二例であり、いずれもほめられた鳥としては扱われていない。しかも、勅撰集のうち後世の規範となった『古今和歌集』に採用されなかったことにより、勅撰集における歌語としての不採用は長く続いた。その用語に関し『万葉集』への回帰の認められるという⁴⁰ 『玉葉和歌集』『風雅和歌集』にようやく数例見られるようになるのは示唆的である。

一方、散文においても、「うぐひす」や「ほととぎす」などのように多くは用いられない。宮島達夫編『古典対照語い表』によれば、「からす」は『竹取物語』に一例、『枕草子』に六例、『源氏物語』『大鏡』『徒然草』にそれぞれ一例ずつである。『枕草子』の「秋は夕暮れ……からすのねどころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つとびいそぐさへあはれなり。まいて雁などの…」（初段）は有名であるが、「さへ」や「まいて」に注目すれば、手放しの礼讃とは言いがたい。ほかには「にくきもの」（二八段）としてあげ、「鳥は」（四一段）では「とび、からす」などのうへは、見入れ聞入れする人、世になしかし」と言い切っている。

歌謡では、平安末期の『梁塵秘抄』には「からすは見るにいろ黒し。さきは年ふれどもなほ白し」（二八六）、「稻荷なる三つ群れからすあはれなり昼はむつれて夜はひとりぬ」（五一四）などがあり、室町末期の『隆達小歌』には「月夜の中からすはほれて鳴く、我もからすか そなたにほれてなく」（三）などがみえる。

さて、当面の「明けがらす」に近い形として、まず、近世前期から「夜明けがらす」「明けのからす」が使われはじめたようである。たとえば、『炭俵・上』には「風細う夜明からすの啼わたり」とあり、『新色五卷書・一・二』には「他人交ぜずの談合極めて、明の日を待ち兼ね、夜明がらすの声に耳を驚かせ」とあり、『松の葉・三』には「せう

しくが三笑止ござる。一に出ぬ首尾、二に舟の雨、土手の夕ぐれ、橋場（江戸郊外火葬場）のけぶり、あけのからすの声々もきのどくなど数例がみられる。ちなみに「からす」の鳴き出すのは「鶏」よりもおくれる。『たとへづくし』には「鶏鳴ひて夜深し」とあるが、「からす」は夜が明けてから鳴くのが普通である。とおく平安時代には鶏鳴の頃にきぬぎぬの別れをせねばならず、江戸時代の廓の朝帰りは鳥の鳴く頃で間に合う。そこで平安時代の憎まれものは鶏で、江戸時代の憎まれものは烏であったといわれる⁹⁰。「三千世界の烏を殺しぬしと朝寝がしてみたい」のである。この常識に反して、本曲のオキ浄瑠璃では「からすはさのみ憎からで、あの鶏はめかりせぬ（氣ガ利カヌ）」（二才とあるのは、題名に「明けがらす」を用いているための特例かと興味ふかい。

さて、「明けがらす」という語は、管見によればまず書名にみられる。貞享二年（一六八五）の俳書『あけ鴉』（一有編）、享保二年（一七三六）初演の浄瑠璃（半太夫節）『明烏口舌枕』などがある。当面の『明烏夢泡雪』とはほぼ同じ頃に成立の『近江源氏先陣館・九』には「はや明けがたも近づけば、我はこれより城内へと、またも畳を、明烏かはい、かはいの声につれ」とある。新内正本には次のような例もみられる。

千代をひと夜に重ねても、ことば残りて、明けがらす、可愛くがつもりては、まして雪の日雨の朝、…無理を言ふての居続けが、
 ▲里空夢夜桜▼

なお「明けがらす」という語に触発されてか、新内正本には「早がらす」（藤桂恋の柵・上）も使われる。

『明烏夢泡雪』は大いに当り、のちに魯中によって『明烏後真夢』が作られた。一方、清元・義太夫など、他の浄瑠璃にも移曲されたことはさきにもふれた⁹¹。最後に、それぞれの末尾をしるして小稿をとじることとする。

ひらりと飛ぶかと思し夢は、さめてあとなく明けがらす、のちの噂やのこるらん ▲（新内）明烏夢泡雪▼
 かなしな、こわさ、あぶなさに、可愛と一声明烏のちの浮名や残るらん。 ▲（清元）明烏花濡衣・下▼
 早や東雲の明烏、飛ぶが如くに遠近や、のちの噂やのこるらん。 ▲（義太夫）明烏六花曙・山名屋段▼

注(1) また「河東上下……」ともいわれる。

(2) 『藤根道雄遺稿集』(竹内道敬編・昭49)の「豊後に最も近い新内節のこと」(90P)による。なお、本書には「新内節年表(稿)」(187P)もある。

(3) 岡本文弥の直話によれば、同人著『新内浄瑠璃古正本考』(同成社・昭54)の第52図(111P)の豊島国大夫本(1)の表紙が、

底本の表紙ではあるまいかとのことである。『藤根道雄遺稿集』(91P)にも同じ表紙とみとめられるものが示されている。この表紙と底本との関係については今後調査をつけたい。なお、豊島国大夫については、両書の116P、90Pにそれぞれ考証がある。

(4) 新内のフシ付けの整理としては岡本文弥『新内曲符考』(同成社・昭47)およびカセットテープ(三味線は四代目宮染、解説文弥、製作麻生芳伸・昭48)がある。

(5) 清水屋治兵衛板には「しのぶ」、和泉屋市兵衛板には「忍ぶ」とある。

(6) 京の墨屋吉兵衛板・和久屋治兵衛板には「めいど」の鳥と聞物を」とある。

(7) 清水屋本には「忝い」、和泉屋本には「かたじけない」とある。

(8) 清水屋本には「かぶろ」とある。なお、『藤根道雄遺稿集』には「禿は上方ではカムロ、江戸では『カプロ』といった云々」(160P)とされている。この底本においても、他の箇所では、「禿」と漢字表記、もしくは「かぶろ」と振仮名が施されている。

(9) 和泉屋本には「ほうこうせよ」とある。

(10) 和泉屋本には「おれ」の右に小字でワシとある。現行演奏では「わし」というのが普通となった。

「明けがらす」考



- (11) 「かはい」「いとし」の語誌については、拙著『身心語彙の史的研究』（明治書院・昭54）の二部・第四章に比較的くわしく述べた。
- (12) 「粹が身を喰ふ」「粹がはまる」ともいう。浜田啓介「滑稽本・総説」（『鑑賞古典文学』34）所収。また、「粹」の考証については大橋紀子の『近代語研究』『学苑』に掲載の一連の論文がある。
- (13) 竹内道敬「新内節の略史」（岡本文弥新内古曲選・別冊）昭56）参照。
- (14) 遊女の仕置に関しては、諏訪春雄「八廓の生活」（『国文学』昭56・11）参照。
- (15) 嘉永四年（一八五二）に清元「明烏花濡衣」、嘉永六年に操芝居で義太夫『明烏雪の曙』、翌安政元年に竹田芝居で現行外題の『明烏六花曙』が上場された。
- (16) 亀井孝「すぐめしうしう」（『成蹊国文』昭45・3）
- (17) 「許呂久」は「あの人が来る」の意と、「からす」の鳴き声の擬声化「コロク」とが掛けられているとするのが通説である。
- (18) 島津忠夫「万葉語と万葉調―新古今歌風形成の問題として―」（福田良輔教授退官記念論文集）所収）
- (19) 瀧川政次郎「後朝」（『吉原の四季』）所収）

本稿を成すにあたり、正本の閲覧・翻刻を許可せられた岡本文弥師、竹内道敬氏に対して厚く謝意を表す。